

氏 名	三枝 優子 (サエグサ ユウコ)
本 籍	千葉県
学 位 の 種 類	博士(学術)
学 位 の 番 号	博甲第 92 号
学位授与の日付	2020 年 3 月 16 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目	日本語教育実習生のキャリア意識の変容 ―学部日本語教員養成コースへの参加過程の分析から―

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	宮副ウォン 裕子
	(副査) 桜美林大学教授	齋 藤 伸 子
	桜美林大学准教授	川 田 麻 記
	立命館大学教授	北 出 慶 子

論文審査報告書

論文目次

第 1 章	研究の背景	1
1.1	大学教育の転換期	1
1.2	日本語教育における現状と日本語教員養成課程	1
1.3	本研究の目的	2
1.4	本論文の構成	2

第2章	先行研究	4
2.1	キャリアに関する研究	4
2.2	キャリア教育に関する研究	7
2.3	体験型学習に関する研究	9
2.4	教育実習に関する研究	10
2.5	言語教育とアイデンティティ	12
2.6	学習観の変遷	13
2.7	本研究の課題	14
第3章	研究方法と調査概要	16
3.1	研究方法の検討	16
3.2	TEAについて	17
3.3	TEMについて	18
3.4	TLMGについて	20
3.5	調査協力者	21
3.6	調査協力者の背景	21
3.6.1	カリキュラム環境について	21
3.6.2	日本語教員養成コースについて	22
3.6.3	日本語教育実習について	22
3.7	収集データと収集方法	25
3.8	分析方法	25
3.9	倫理的配慮	26
第4章	調査結果と分析	27
4.1	TEM 図による類型化	27
4.2	日本語教員直進型の日本語教員養成コース参加過程	29
4.2.1	スズキの場合	31
4.2.2	ホシノの場合	35
4.2.3	アオキの場合	39
4.2.4	シマダの場合	43
4.2.5	日本語教員直進型の径路	47
4.3	葛藤経験型の日本語教員養成コース参加過程	48
4.3.1	コイワの場合	49
4.3.2	トダの場合	53
4.3.3	ヒヤマの場合	58
4.3.4	サイトウの場合	62

4.3.5	葛藤経験型の径路	66
4.4	学校教員直進型の日本語教員養成コース参加過程	67
4.4.1	オオタの場合	68
4.4.2	キドの場合	72
4.4.3	学校教員直進型の径路	76
4.5	自己目的型の日本語教員養成コース参加過程	77
4.5.1	タダの場合	78
4.5.2	コウノの場合	82
4.5.3	自己目的型の径路	86
4.6	第4章のまとめ	86
第5章	考察—社会的要因の分析から—	88
5.1	日本語教員直進型に見られる社会的要因	88
5.1.1	第Ⅰ期 日本語教員になりたいと思う	88
	時期の社会的要因	88
5.1.2	第Ⅱ期 日本語教員になるための実践を積む	89
	時期の社会的要因	89
5.1.3	第Ⅲ期 実践を積みながら具体的な将来像を思い描く	90
	時期の社会的要因	90
5.1.4	日本語教員直進型における社会的要因に関する考察	91
(1)	制度的要因	91
(2)	人的要因	92
(3)	社会環境的要因	93
5.2	葛藤経験型の社会的要因	99
5.2.1	第Ⅰ期 日本語教員養成コースを知り興味を持つ	99
	時期の社会的要因	99
5.2.2	第Ⅱ期 日本語教育実習に参加し日本語教員に	100
	興味を持つ時期の社会的要因	100
5.2.3	第Ⅲ期 他の職業と比べ悩みながら職業を選択する	101
	時期の社会的要因	101
5.2.4	葛藤経験型における社会的要因に関する考察	101
(1)	制度的要因	102
(2)	人的要因	103
(3)	社会環境的要因	104
5.3	学校教員直進型の社会的要因	110
5.3.1	学校教員直進型における社会的要因に関する考察	110

(1) 制度的要因	110
(2) 人的要因	111
(3) 社会環境的要因	111
5.4 自己目的型の社会的要因	115
5.4.1 自己目的型における社会的要因に関する考察	115
(1) 制度的要因	115
(2) 人的要因	116
(3) 社会環境的要因	116
5.5 類型を超えた社会的要因	119
5.6 第5章のまとめ	120
第6章 考察ーキャリア意識変容の分析からー	122
6.1 日本語教員養成コースへの参加過程と キャリア意識の変容	122
6.2 TLMG の図表化について	122
6.3 日本語教員直進型のキャリア意識の変容	123
6.3.1 スズキの場合	123
(1) 教員に関する意味づけの変容	124
(2) 授業に関する意味づけの変容	124
6.3.2 ホシノの場合	126
(1) 海外に関する意味づけの変容	126
(2) 実践共同体参加に関する意味づけの変容	127
6.3.3 日本語教員進型のキャリア意識の変容のまとめ	128
(1) キャリア・モデルとの関わり	128
(2) 実践共同体への参加による評価	129
6.4 葛藤経験型のキャリア意識の変容	130
6.4.1 コイワの場合	130
(1) 教育に関する意味づけの変容	130
(2) 言語に関する意味づけの変容	131
6.4.2 サイトウの場合	133
(1) 教員に対する意味づけの変容	133
(2) 学習者に対する意味づけの変容	134
6.4.3 葛藤経験型のキャリア意識の変容のまとめ	135
(1) 移動による新しい価値づけ	135
(2) 移動による自己への評価の変容	136
(3) 日本語教育に対する新たな意味づけ	137

6.5	学校教員直進型のキャリア意識の変容	139
6.5.1	キドの場合	139
6.5.2	学校直進型キャリア意識の変容のまとめ	140
6.6	自己目的型のキャリア意識の変容	141
6.6.1	タダの場合	141
6.6.2	自己目的型のキャリア意識の変容のまとめ	142
6.7	第6章のまとめ	143
第7章	総合考察	146
7.1	日本語教員養成コースへの参加過程	146
7.2	日本語教員養成コースへの参加過程と社会的要因	146
7.3	日本語教員養成コースへの参加過程とキャリア意識の変容	147
7.4	キャリア教育としての日本語教員養成コース	149
第8章	本研究の意義と今後の課題	152
8.1	本研究の意義	152
8.2	本研究の限界と今後の課題	153
参考文献		-1-
参考資料		I

謝辞

論文要旨

本論文は、大学学士課程の日本語教員養成課程を修了した学生を調査協力者とし、4年間の課程内の経験とキャリア意識の変容について質的研究法で分析・考察したものである。

本論文は全8章から構成されている。まず第1章では研究の背景として、大学教育の転換期における日本語教員養成課程の現状、大学におけるキャリア教育が注目される現在、研究の蓄積が十分ではない日本語教員養成課程を研究対象とする緊急性と重要性を論じた。

第2章では研究課題解明に向け、キャリアおよびキャリア教育に関する先行研究について概観し、キャリア教育で注目されている体験型学習および教育実習を取り上げた。次に、日本語教育実習の特性である言語教育とアイデンティティに関連する研究、その背景にある学習観の変遷に言及した。最後に、本研究におけるキャリアの意味を定義し、研究課題を提示した。研究課題は(1)

日本語教育実習生はどのように日本語教員養成課程へ参加したのか、その参加を促したものは何か、(2)日本語教員養成課程に参加することでどのようなキャリア意識の変容があったのか、という2点である。

第3章では本研究で用いる複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: 以下 TEA とする)について詳述した。本研究の調査協力者は首都圏にあるA大学文学部に在籍し、日本語教員養成課程を修了した学生12名である。

第4章では、調査協力者12名の履修選択と職業選択をTEAのTEM(Trajectory Equifinality Model)図に描くことで、選択に至る経路を類型化した。その結果、「日本語教員直進型」「葛藤経験型」「学校教員直進型」「自己目的型」の4つの型に分類した。この類型から、日本語教員養成課程を選択するものは日本語教員志望者だけではないこと、修了後の職業選択についても、日本語教員、学校教員、一般企業など多様であることがデータから実証され可視化された。

第5章では、研究課題(1)の解明のため、TEM図に表れた社会的要因を分析考察した。その結果、社会的要因は「制度的要因」「人的要因」「社会環境的要因」「その他」に大別でき、それぞれの特徴を論じた。

第6章では、研究課題(2)に対し、TEAのTLMG(Three Layers Model of Genesis)を用い、4年間のキャリア意識の変容を考察した。その結果、日本語教育実習を中心とした日本語教員養成課程の特徴として、複数の共同体への出入りや移動を伴うこと、多様な他者からの評価の存在、自己効力感が感じられる教育構造になっていることから、意識の変容が促される点を指摘した。また4年間に継続的に観察対象としたことで複数の実践共同体に関わりながら変容するキャリア意識を可視化し、とらえることができた。

第7章では、本研究の分析結果をまとめ、最後に、本研究で得た知見をもとに今後の日本語教員養成コースの在り方を含め、キャリア教育としての日本語教員養成コースについてカリキュラム評価的な視点から提言を試みた。

第8章では本研究の意義と今後の課題を述べた。本研究の意義は大学における4年間の正課授業活動の中で変容する個別性、固有性のあるキャリアを具体的に捉えた点、キャリア支援教育としての履修制度やカリキュラムの在り方の検討の可能性を示すことができた点である。今後の課題としては、よりマクロな視点から修了生を対象とした考察、また、よりミクロな観点から日本語教育実習における変容についてなどの研究などを挙げ、取り組みたいと考える。

論文審査要旨

本研究は、大学学士課程の日本語教員養成課程（以下、養成課程）を修了した12名の学生を調査協力者（以下、協力者）とし、4年間の課程内の学習経験と教育実習とを関連づけ、協力者のキャリア意識の変容を質的研究法で分析・考察したものである。

日本語教育推進法が決議されるなど日本語教師の資格が再考されている現在(2019 年)において、本研究は、大学における養成課程の在り方を、受講生(協力者)の視点や意味付けを丁寧に記述し示すことに成功しており、社会的・教育的意義が高いと考える。従来型の知識・技能の獲得としての養成課程における学びに加え、キャリア構築論や状況(学習)論などの新しい学習観に基づいたアプローチで、青年期からの移行期にある大学生(協力者)のキャリア意識の変容を捉えており、今後の養成課程プログラムの再考に有意義な内容を提供している。12 名という、質的研究においては比較的多い人数を長期間、継続的に観察したデータの分析を通して、変化経路の類型を明示した点にも独自性がみられる。先行研究や背景理論においては、さらに俯瞰的な視点や深化の必要な個所が散見されるが、実証研究としての意義は大きく、その結果や知見を教育現場において還元できる点は高く評価できる。

以上のような総評により、審査委員会委員が全員一致で、本研究は博士論文としての研究水準を満たすものと判定した。

口頭審査要旨

最終試問においては、最初の 30 分間に執筆者本人がパワーポイントを用いて本研究について口頭発表を行った。次の 30 分間は、副査 3 名による質疑応答が行われた。1) SD(社会的助成)と SG(社会的方向づけ)の捉え方と解釈(相関関係、文脈により生じる変化など)、2) 実習の内容(時期、期間、場所[国内、海外]、受け入れ体制、回数など)と変容の関連性、3) 人的要因としての教師やメンター(先輩を含む)の役割などについて、副査より質問がなされた。執筆者本人はそれぞれの質問について適切に答えることができた。本研究の範囲外となるような指摘事項については、今後の取り組みとして説得力のある説明を行った。

執筆者本人は、これまでの中間試問審査において副査から示された多様なフィードバックにも丁寧に取り組み、最終稿の執筆過程において学術的な成長を遂げたことが明らかである。今後も教育現場への還元性の高い実践研究に主体的に取り組んでいける学術・研究能力を有していると判断できる。以上のような総評から、本研究論文は、博士論文としての研究水準を満たすものとして、審査委員会委員全員一致で合格と判定した。

なお、試問当日は、本学の教職員、在校院生および修了生(日本語教師、教育研修担当中の教員)が出席し、コメントや質問が出されたことを記しておきたい。